獨協医科大学埼玉医療センター
女性医師支援センター

Vol.4
2022.11月発行

ミモザレター

第4回の発行となる本号は、
放射線治療センター　野嵜美和子先生と
耳鼻咽喉・頭頸部外科　鈴木優美先生から
メッセージをいただきました。

「ミモザ」に寄せて

放射線治療センター　センター長　野嵜美和子

「ミモザ」が女性医師支援センターのシンボルフラワーになりました。「ミモザ」は可憐な黄色い花々が集まっていくつもの花房を作る美しい花です。女性医療従事者のキャリア継続を支援する当センターにふさわしいシンボルフラワーであると思います。

「ミモザ」について忘れられない景色があります。オーストラリアの西海岸、パースから奇岩景勝地へと続く広い道路の右側に奇怪な形のサボテン群、左側に野生のミモザの群生がどこまでも広がっています。野生のミモザ草原の中に降りたった時、「ミモザ」がオーストラリアの国花であること、その鮮やかな黄色と緑がオーストラリア代表のスポーツ選手のユニホームの色であること、国際女性デーのシンボルフラワーでもあることをガイドの説明から初めて知りました。母と最後に出かけた海外旅行の思い出です。

私の母は、女性医師が極めて少なかった時代、戦後の混乱期の中で女性医師となり、その後私を含めて４人の子供を育てたあと最後まで医師として働きながら89歳でその生涯を終えました。戦後のあの時代に女性たちが、社会への扉のわずかな隙間に細い指をかけて血の滲むような思いで扉をこじ開けてから、すでに77年がすぎました。時代とともに扉はどんどん開かれて、より大きく解放され自由に往来できるようになったはずです。けれども、扉は開かれていても歩いていく道はまだまだ平坦ではありません。この道をいつ、どこをどう進んで、何を目的として歩いていくのかは本人が決める問題かもしれませんが、道を整備して通りやすくしなければなりません。通ったことのある人は、どこに障害物があるか、どうすれば乗り越えられるか、どこを迂回すればいいか、を助言したり支援したりすることができます。それが私たち先を歩いて来た人間の役割です。一方で、道から障害物を取り除いて歩きやすく舗装していくのが社会全体の役割です。そして、今を懸命に歩いている人たち同士が相互に助け合い情報を共有し合うことも大切なことです。

「若い女性医師たちには、可能な限りジェンダーとは無関係に頑張ってほしい。一方でライフワークバランスから一時的には仕事を減らしてもいいし休んでもいい。だけど医師は辞めずに続けて欲しい。」と私は思っています。キャリアを継続する途中で立ち止まって休んでも迂回してもいいと思います。でも一旦すっかり辞めてしまったらスタートラインからもう一度歩き始めることは本当に大変です。立ち止まっている時間は逆に貴重です。その間に自分がどう生きたいのか改めて考え、どの方向へも歩きだすことができるからです。また、いつ歩き出しても遅すぎるということはありません。自分らしく進んでください。そして、本院の女性医師支援センターが活動の輪を少しずつ広げて、今を一生懸命に歩き続けている皆様の支援となれることを祈ってやみません。

女性医師からのメッセージ

耳鼻咽喉・頭頸部外科・学内助教
鈴木　優美

2017年4月に耳鼻咽喉・頭頸部外科に入局させて頂き、今年で6年目になりました。昨年行われた専門医試験に無事合格し、現在は頭頸部疾患をメインに耳鼻科の全般的な疾患に携わらせて頂いています。もともと手術で治せる医師になりたいと思い、外科医を目指すようになり、特に当科は耳科、鼻科、頭頸部科と診れる・治せる疾患が多岐にわたること、手術も1時間程度から何時間も要する手術があること、他科との協力を要する手術など様々存在すること、また内視鏡や顕微鏡等のデバイスを必要とする手術など、1つの科で沢山のことが出来るようになるのではないかと思い、興味を持ち、現在に至ります。

1人の外科医師として早く一人前になり、より多くの患者さんを手術して治したい！と思う反面、外科医としての時間を割く中で1人の女性としての幸せを掴むことはそう簡単ではないのではなかろうか、と思う事もありました。幸いなことに2020年に夫（他院の小児科医です）と結婚することができ、仕事も私生活も充実しています。各々がやりたいことを尊重すべく、入局した病院が異なります。また県も違います。働けるうちに、学ばせてもらえる場所があるうちに、沢山の事を身につけていこうね！と夫と約束をして別居という選択を取りました。寂しいと思うこともありますが、ずっと一緒にいるだけが結婚生活でもないと思いますし、夫とはこの先ずっと一緒にいれると思いますが、今の自分が今の環境でできることには限りがあると思ったので、夫との新婚生活は見送りました。現在子供はまだ居ませんが、将来的には考えています。夫は今から子供が生まれたら、育休をとると意気込んでくれています。

1人の医師として1人の人間として仕事も私生活も充実させて行きたいと強く思っています。1人で行うことは難しいことも沢山あると思いますが、元々人生も医師という仕事も1人で全てをこなす事は難しいと思います。困ったときはお互い様だと思います。困ってしまったら、医局の先生方や女性医師支援センターに頼らせて頂こうと、勝手ながら思っています。数多くの手術を任せてもらえるこの医局には感謝しかありません。また夫という最高の良き理解者がいてくれて、私は幸せ者です♡

＜担当窓口＞
事務部職員課：内線2121・mail：koshoku@dokkyomed.ac.jp